英語の擬音語表現の品詞とその起源

西村香奈絵*

Parts of Speech and the Origins of Onomatopoeic Expressions in English

Kanae NISHIMURA

Abstract

This study claims that typically, onomatopoeic expressions in English are not derived from interjectional usage as they are in most cases in Japanese. Referring to Tamori and Schourup (1999), we overview basic characteristics of onomatopoeic usage in English. Onomatopoeic expressions are not so often used as an adverb in English as in Japanese, but they tend to be used as a noun or a verb. Tamori and Schourup (1999) observed more in detail and claimed that it is easier to use onomatopoeic expressions as a noun than as a verb when they are used impromptu. This implies that onomatopoeic expressions are typically derived from impromptu interjectional usage and that as their usage becomes more and more conventional, their usage as a noun and then as a verb becomes possible. It can also be led that there are more nouns for onomatopoeic expressions than verbs. To verify these propositions, this paper examines the number of each part of speech used for onomatopoeic expressions and their derivational origins referring to *Oxford English Dictionary*. It turns out that there are more verbs than nouns for onomatopoeic expressions in English and that more onomatopoeic words are originated from verbs than nouns. The results contradict the two propositions derived from Tamori and Schourup (1999). Rather, the opposite direction is implied in derivation of onomatopoeic expressions in English: namely, the usage as a verb, or less often as a noun, is more often the origin to derive interjectional usage, not the way around as supposed in Tamori and Schourup (1999).

Keywords：① onomatopoeia　② imitating words　③ English ④ derivation ⑤ *Oxford English Dictionary*

1．はじめに

英語を含むインド・ヨーロッパ語族の言語においては，擬音語や擬声語は一般的に子供が用いる表現だと考えられている（スコウラップ 2011・1993，筧 1986）．それに対して，日本語は擬音語や擬声語が豊富な言語であり，子供のみならず大人にも日常的に使用される．英語と日本語の擬音語・擬声語には，言語体系全体に占める役割の違いとともに，使用法やその派生過程にも違いが見られると考えられる．本稿は，英語における擬音語・擬声語の使用法を整理した後，派生の起源を調べる。そして英語の擬音語・擬声語は，日本語のように，間投詞用法が起源となり，名詞や動詞用法が生じるのではないことを主張する．

英語の使用法については，田守・スコウラップ（1999）が詳しくまとめているので，まずこれを中心に擬音語・擬声語の使用法を概観する．英語においては，擬音語・擬声語は，日本語のように副詞として使用されることはあまりなく，大抵名詞や動詞として用いられる．田守・スコウラップ（1999）は，さらに詳細な観

受付：令和２年11月５日　受理：令和３年１月８日
＊近畿大学総合社会学部　准教授

察を加え，臨時語は，動詞としては使用しにくいが名詞としてなら使用が比較的容易であると述べており，これに従うと，臨時語の間投詞用法→名詞→動詞という派生過程が成立しやすいことが導かれる．さらに，擬音語・擬声語語彙としては，名詞の方が数が多いことが予測される．これらの命題・予測が正しいのかを明らかにするため，『Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM（v.4.0.0.3）』の記載を基に，品詞数と派生起源の数を比較する．結果として，名詞語彙より動詞語彙の方が多く，名詞が派生起源となっている語より動詞が派生起源となっている語の方が多いことを明らかにする．つまり，田守・スコウラップ（1999）の予測とは反対に，実際には動詞や，それより低い頻度で名詞が起源となり，間投詞用法を派生させている．

最後に，本調査結果が田守・スコウラップ（1999）の主張から導かれる予測と矛盾するものであった原因について考察し，名詞派生起源語と動詞派生起源語の語彙の形式と意味を比較し，それぞれの特徴を明らかにする．

２．英語の擬音語・擬声語の使用法

2.1　擬音語と擬声語

擬音語の中に擬声語を含める場合もあるが，本稿では両者を区別して呼び分けることにする．英語の用法において両者に若干の違いがあることが指摘されているためである．擬音語・擬声語は，その言語話者に共有される音声象徴とその言語の音素体系に則った言語音として表現されたものであり[1]，様子や状態，感情などを表す擬態語と対立させられる．物理音の中には，人間や動物の声を模したものと，それ以外のものがあるが，その区別に対応するものが擬声語・擬音語の区別である．擬声語には「ニャーニャー」「チューチュー」といった動物の鳴き声や，「うーん」「ワーイ」といった人間のうなり声や歓声等が分類され，「カチャッ」というドアの閉まる音や「サクサク」と物を食べる時に出る音は擬音語に分類される．

英語の擬声語は，擬音語と比べて語彙的に不安定であるという（田守・スコウラップ 1999）．以下，擬音語，擬態語の順に先行研究で指摘される用法の特徴を見ていきたい．

2.2　擬音語の用法

英語の擬音語は，名詞あるいは動詞として使用されることが一般的である．田守・スコウラップ（1999）は，さらに踏み込み，名詞用法より動詞用法の方が，「英語においてどれほど定着しているかという慣習度」を求めると述べる．次の例の対比は，動詞用法を持つ擬音語は，名詞用法しか持たない擬音語より語彙として定着しており慣用度が高いことを示す．（1）の croak，（2）の glitter は名詞としても動詞としても使用される．しかし（3）の glug-glug，（4）の blam は，名詞としての用法はあるが，動詞としての用法はない[2]．

（1）a. We heard the croak of a frog.（田守・スコウラップ 1999: 99）
　　b. The frog croaked.（*Ibid.*）
（2）a. The glitter of gold is irresistible.（*Ibid.*）
　　b. The gold glittered irresistibly.（*Ibid.*）
（3）a. *He glug-gluged the wine.（*Ibid.*）
　　b. With a “glug-glug,” he drank off all the wine.（*Ibid.*）
（4）a. *The can blammed loudly.（*Ibid.*）

1）従って，言語音による表現でない動物の声と聞きまがうような鳴き声や，楽器とそっくりな音を出すボイスパーカッションは，擬音語・擬声語に含まれない．

2）田守・スコウラップはまた，逆に名詞用法を持たず，動詞用法のみを持つものもあると述べ，bawl, coo, gurgle, cram, tramp, crumple のような語彙を挙げている．しかし，『ランダムハウス英和辞典』等の辞書によると，いずれの語も動詞及び名詞の意味を持つ．さらに，OED によると，gurgle の名詞用法は動詞用法から派生したと述べられており，田守・スコウラップの記述に反する．以上から，田守・スコウラップの名詞用法しか持たない動詞であるという上記分類には疑問がある．

b. The can burst with a loud “blam.”（*Ibid.*）

さらに田守・スコウラップ（1999）は，臨時語は名詞として用いることは可能であっても，動詞として用いられることはやや難しいことを指摘している[3]．

（5）a. With a loud “schlook,” the puppy kicked up the spilled water.（田守・スコウラップ 1999: 96）
b. ? The puppy shlooked up the spilled water.（*Ibid.*: 99）

（6）a. With a “skrank,” he twisted the knob right off.（*Ibid.*: 96）
b. ? He skranked the knob right off.（*Ibid.* : 99）

（7）a. With a “groahhrrr,” the beast leaped from behind the curtain.（*Ibid.*: 96）
b. *The beast groahhrrred and leaped from behind the curtain.（*Ibid.* : 99）

以上の事例から，英語では擬音語は臨時語であっても名詞としては容易に使用できるのに対し，動詞としては使用しにくいことが示されている．

田守・スコウラップ（1999）は，英語の擬音語の用法は，動詞よりも名詞用法の方が多いとは述べていないが，名詞としての方が自由な使用を許すことを明らかにしている．では，実際の使用頻度はどうなのか．筧（1988）は，英語におけるオノマトペ（＝擬音語・擬声語と擬態語の総称）は，品詞的に動詞として用いられることが多く，名詞や形容詞として起こることもあると述べており，動詞の使用が最も多いことが示唆されている．また，西村（2014）の調査でも，動詞の使用の方が名詞の使用よりも多いことが報告されている．さらに，尾野（1984）は，日本語と英語のオノマトペ表現を比較し，「日本語は動詞限定による句表現を用いるのに対し，英語は動詞的表現をとるといえる」と述べている[4]．田守・スコウラップの指摘はこれらの先行研究の指摘と矛盾するように見える．この点について，3節以降で考察を加えたい．

最後に副詞用法について言及しておきたい．日本語と比較した場合，英語の擬音語との使用法の大きな違いは，日本語の擬音語・擬声語が上古の時代より，基本的に副詞として世界の音や様態，人の感情を表すという形態をとる（山口 2012・2002，鈴木 2014）のに対して[5]，英語の擬音・擬声語が副詞的に用いられる例は少ないということである．西村（2014）においても，副詞的に用いられた例は 21 例中 1 例も報告されていない．以下は，田守・スコウラップ（1999: 105-106）の挙げる副詞的用法の用例である．いずれも括弧内のような間投詞としての使用は自然であるが，副詞的な使用は「やや不自然」であるという．

（8）a. ?I bit crunch into the pretzel.（cf. Crunch! I bit into the pretzel.）
b. ? The book fell thud onto the desk.（cf. Thud! The book fell onto the desk）
c. ? The police fired a warning shot bam into the air.（cf. Bam! The police fired a warning shot into the air.）

一方，田守・スコウラップ（1999: 104-105）は次のような例を挙げて，副詞様態的に用いら

3）一方で，boing（*the boing of a ball/ *The ball boinged.）のように名詞としても動詞としても使用できない「臨時語的なオノマトペ」もあるという．

4）尾野は証拠として「泣く」を例として取り上げ，日本語では「あーんあーんと泣く」「おいおい泣く」「おぎゃーと泣く」のようにオノマトペにより動詞の表す行為を限定するが，英語ではそれぞれに対して bawl, blubber, mewl のように異なる動詞で表わし分けている事例を指摘している．

5）角岡（2007）が指摘するように，擬態語の中には，形容動詞や動詞等の実詞語彙から派生されたものがある．角岡は網羅的にそのような擬音語・擬態語を数え上げているわけではないが，角岡（2007）を見る限り，実詞語彙から派生されているのは，擬態語に限られる．擬音語の語彙は，音や声を模した表現が基本的用法としてある後，実詞語彙へと派生していくという道筋は成立しているようである．

れることもあると述べつつも，方向を表す句が伴わなければ不自然になることを示し，副詞的用法の不安定さを指摘している．

(9) a. His wristwatch fell kerplop into the swimming pool.
b. ?? The wristwatch fell kerplop.

(10) a. The train moved clickety-clack down the tracks.
b. ?? The train moved clickety-clack.

(11) a. Rain fell pitter-patter against the windowpane.
b. ? The rain fell pitter-patter.

以上において，英語の擬音語の使用法を概観した．まず，英語の擬音語は，名詞用法の方が臨時語の使用に寛大で，動詞よりも開かれた用法であり，慣習的定着度が高いものは名詞用法に加えて動詞用法を持つ傾向が指摘されている（田守・スコウラップ 1999）．しかし，実際によく使用されるのは動詞であるという指摘があり（筧 1988），その傾向が調査により報告されている（西村 2014）．最後に，日本語で中心的な役割を担う副詞的用法は，英語では稀であり，可能であるとしても動作の方向を表す句が必要であるという制約を持つ（田守・スコウラップ 1999）．

2.3　擬声語の用法

田守・スコウラップ（1999）は，次のような対比を指摘し，英語の擬声語は，擬音語と比べて，語彙的に不安定であると述べる．擬声語を名詞として用いるには，何らかの文脈を提供し場面設定を行う必要がある．鳴き声だけを単独で用いる（12）の文は，多くのネイティブ話者に不自然に聞こえると言う．（13）のように，文脈を限定する要素が加われば自然になる．

(12) a. ? I heard a caw.
b. ?I heard a baa.
c. ? I heard a mew.（田守・スコウラップ 1999：93）

(13) a. Listen! I can hear the caw of a crow.（*Ibid.*: 99）
b. The sheep walked up to us and uttered a single plaintive ‘baa.’（*Ibid.*：94）
c. From the box came a single soft sound. It could have been the mew of a cat.（*Ibid.*: 94）[6)]

最後に動物の鳴き声を表す擬声語の中でも，名詞用法を許すか，動詞用法を許すかにおいて違

6) 以下の［A］は caw, baa, miaow の鳴き声を表す名詞が不定冠詞と共に用いられている実例で，［B］は（12）で「?」が付された不自然な文として挙げられた“I heard …”が用いられた例である．これらの文の使用が可能であるのは，何らかの補足情報，特に鳴き声を出す対象を示唆する記述を伴うためであると思われる．

［A］a. Another Tengu looks down as a frog hops between his leg. He SCREECHES and STOMPS down his taloned foot, missing the creature by inches. We hear a CAW and …. (H. Saban et al., *Mighty Morphin Power Rangers*. Searched in COCA = Corpus of Contemporary American English)（下線強調は筆者．以下同様．）
b. But first, what’s in a bleat or a baa? You could ask a sheep or you could call up Professor Mark Feinstein …（Interview: Professor Mark Feinstein discusses vocalizations of sheep, from NPR_Saturday, 2003 11.1. Searched in COCA）
c. Saussure insists, convincingly enough, that the linguistic sign is arbitrary, in the sense that there is no necessary connection in English between the signifier “cat” and its signified, the mental concept of a little furry animal with four legs, a tail, and a miaow.（Wright, Terence R., Reader-response under review: Art, game, or science?, in *Winter 95*, Vol. 29 Issue 4, p529, 20p, 1995. Searched in COCA）

［B］a. Creepy, I said to myself as I heard a caw and the flutter of wings brush past my head.（E. McCloskey, *Myth*）
b. But when I turned to jump over the gap, I heard a “baa” from below. I’d forgotten one of the sheep.（M. Etchart, *The Good Oak*. Google ブック検索）
c. As I opened the door I heard a “Baa, maa, baa,” and there stood a white goat.（M. Breckinridge, *Wide Neighborhoods: A Story of the Frontier Nursing Service*. Google ブック検索）

いが見られるのだろうか．『いろんな国のオノマトペ』の中で動物の鳴き声の比較として挙げられている 10 種類の動物の鳴き声について，OED において記載されている品詞を調べると次のようになっている（「表 1」）．

表 1　英語における動物の擬声語の品詞

	動物	日本語の鳴き声	英語の鳴き声	OED 記載の品詞
1	猫	ニャーニャー	meow, miaow	間投詞，名詞，動詞
2	犬	ワンワン	bow-wow	間投詞，名詞，動詞
	犬	ウー	woof	間投詞，名詞，動詞
3	牛	モーモー	moo	動詞，名詞
4	豚	ブーブー	oink	動詞，名詞
5	ひつじ	メーメー	baa	動詞，名詞
6	ライオン	ガオー	roar	動詞，名詞
7	鶏	コケコッコー	cock-a-doodle-doo	動詞，名詞
8	小鳥	ピーチクパーチク	cheep	動詞，名詞
9	カッコウ	カッコウ	cuckoo	動詞，名詞
10	カエル	ケロケロ	croak	動詞，名詞

絵本で取り上げられる鳴き声は，ある程度慣習化されたものであるためか，全ての鳴き声に名詞及び動詞の用法があった．日本語では，数例を除き[7] いずれの擬声語も間投詞としての用法しかないのと対照的である．しかし，全ての擬声語において，動詞と名詞の用法が揃っているわけではなく，例えば“Arf!”という犬の鳴き声や，“Uh…”という人が考えたり話すのをためらったりする時に発する声，“ho ho”という笑い声は，間投詞でしか用いられない．また“ding-a-ling”のように間投詞や名詞としてしか用いられず，動詞用法を持たないものもある．さらに名詞用法がなく動詞用法を持つ語もある．例えば“ha”のような驚き，喜びなどから「おや，まあ」等と言う時に用いる間投詞は，名詞用法はないとされるが，動詞用法はある（eg. … the woman hymned and hummed and haed, impressed.” *M. Risa, My Before and After Life*, retrieved from COCA）．

7）「ニャーニャー」「ワンワン」「カッコウ」は鳴き声を表すと同時に，鳴く動物（猫，犬，カッコウ）を指す．

2.4　まとめと課題

以上をまとめると，次のようになる．

（14）（i）英語の擬音語・擬声語は，名詞あるいは動詞として使用されるのが最も一般的である．
（ii）臨時語の使用は，動詞よりも名詞としての用法の方が許容度が高い．
（iii）使用頻度は，名詞より動詞の方が多い傾向が観察される．
（iv）擬声語は，擬音語よりも安定度が低く，特に声を発した主を示唆するような文脈がないと不自然である．

このうち（ii）と（iii）は，互いに矛盾するように見える．（ii）によると，英語の擬音語・擬態語は動詞用法より名詞用法の方が多いことが予想される．これは，（iii）の傾向と矛盾するように見える．次節では，OED（Oxford English Dictionary, v.4.0.0.3）での語源に関する記述を整理し，英語の擬音語の品詞と派生起源を調べ，（ii）から導かれる予想が正しいのか，また（ii）と矛盾する観察が何を意味するのかを考察する．

３．英語の擬音語・擬声語の派生起源

3.1　擬音語・擬声語の名詞用法数と動詞用法数の比較

現在英語において擬音語として使用され，音の模倣が起源となっている語の内，辞書に記載されている用法は，動詞と名詞のどちらが多いのか，また複数の品詞にわたって用法が記載されている場合には，どの品詞の用法が派生の起源となっているのかを調べる．

まず，音の模倣を起源とする語であるか否かは，OED での語源記述が［Echoic］となっているかを基準に決定する[8]．英語において擬音語として現在使用されている語を選び出すため，『マンガで楽しむ英語擬音語辞典』（以下『英擬音語辞典』）を用い，これに語彙項目としての記載があるかを調べる．

OED において，語源欄に［Echoic］と記載されている単語は見出し語にして 586 語（名詞 265，動詞 251，形容詞 11，副詞 11，間投詞 48，ただし重複を含む[9]）ある．この中には，［Echoic］と断定されているものだけでなく，［Prob. echoic.］（=probably echoic）や，［Anglo-Irish, prob. of {echoic} origin.］のように，Echoic 起源である可能性が述べられているものも含む．これらの語から，オノマトペとしての用法が確実にあるものを選び出すために，『英擬音語辞典』を参照し，これに掲載されているかどうかを調べた．結果，重複を除き 136 語（名詞 67，動詞 83，形容詞 5，副詞 5，間投詞 26，以上から重複 49 を除く）[10] が該当することが分かった．従って，派生起源の調査はこの 136 語，つまり OED の語源欄において［Echoic］と書かれている語のうち『英擬音語辞典』に収録されている語を調査対象とした．

136 語は，OED の語源欄に［Echoic］と記載される語であるが，同形の他品詞への派生語は漏れている可能性がある．なぜなら，同形派生語は“Echoic”の記載がなく，検索結果としてヒットしないためである．そこで，これら 136 語について，OED において他品詞での用法の記載があるかも調べた．別の語彙項目として扱われている語の品詞だけでなく，当該語彙項目において他品詞の用法が書かれている場合にも，その品詞の記載があるものとみなした．これにより，136 語について，OED で記載のある品詞の一覧を作成し，その数を比較すると次のような結果が得られた．

表２　調査対象 136 語の OED に記載されている品詞数の比較

名詞（動詞なし）	動詞（名詞なし）	名詞＆動詞	間投詞のみ	計
15	7	108	6	136

形容詞のみや副詞のみが記載されているものは一つもなく，名詞，動詞，間投詞の三つの品詞のみにおいて記載があった．「名詞（動詞なし）」の「15」は，動詞用法の記載がなく名詞用法の記載がある語の数であり，動詞以外の品詞との同時記載があるものも含んだ数である．従って，名詞のみの語及び名詞とその他の品詞（間投詞，形容詞，副詞）との同時記載のある語が数えられる．同様に，「動詞（名詞なし）」では，名詞用法の記載がなく動詞用法の記載がある語の数を数える．「名詞＆動詞」は，名詞と動詞の両方の品詞の記載のある語を数えるが，これが大半を占めた．間投詞のみの記載がある語は 6 語であった．それ以外の品詞が単独で記載されている語は一つもなかった．

以上から，名詞と動詞の両方の用法を持つ語が圧倒的多数を占めることが改めて確認された．また，名詞と動詞の比較では，名詞の方が単独記載数が多い．従って，英語の擬音語・擬

8）OED の語源記述には［Imitative］もあり，こちらも音の模倣が起源であることを表すこともあるが，他の語の模倣が起源であることを表すこともあり，今回の調査では対象から外した．しかし，より包括的な調査のためには［Imitative］という語源記述のある語も考慮する必要があるだろう．

9）見出し語の中には「pinge n. and v.」のように異なる品詞語彙も同一の見出し語となっている場合があるが，その場合は先に記されている品詞で数えた．

10）一覧表は，付録①として掲載する．

態語の語彙数は動詞よりも名詞の方が多いということが言える．

これは田守・スコウラップ（1999）の観察（=（14）（ii））と必ずしも合致しない．田村・スコウラップのいうように，擬音語が動詞より名詞として使用する方が許容されやすいのであれば，名詞用法を持たず動詞用法のみをもつ語の存在は例外的なものとなる．130 例中 7 例を占める割合は 5% と例外的とみなせる低さではあるものの，名詞と動詞の両方の用法を持つものが 130 例中 108 例（83%）あり，田守・スコウラップの主張するほど強い傾向ではないと考えられる．

3.2　擬音語・擬声語の派生起源

田守・スコウラップ（1999）によると，臨時語の使用に関しては，動詞より名詞としての方が使用が容易である．これから，ある擬音語・擬声語が複数の品詞で用いられている場合，その派生関係において起源となるのは，動詞よりも名詞の方が多いことが予想される．これは正しい予測であるのか．OED では派生関係について「A is formed on B」という記載により示されており，これに基づき派生起源を調べた．結果は，名詞よりも動詞が起源となって他の品詞の派生語を形成することが多いというものであった（「表 3」）．

表 3　擬音語・擬声語の派生起源

名詞起源	動詞起源	間投詞起源	不明	計
23	45	6	65	136（重複した 3 語を除く）

数値には，それぞれの品詞の用法しか記載されていない語の場合は，派生起源の記述がなくてもその品詞を派生起源として数えた．「重複した 3 語」は，起源として複数の品詞が記載されているもので，例えば名詞と間投詞が起源として併記されている語が含まれる．

語彙項目として名詞（動詞なし），動詞（名詞なし），及び名詞と動詞の両方，の記載があるもの毎に分けて比較したものが次の表である（「表 4」）．

表 4　派生起源：名詞，動詞，名詞＆動詞の比較

	名詞起源	動詞起源	間投詞起源	不明	重複	計（重複を除く）
名詞（動詞なし）	8	0	1	7	1	15
動詞（名詞なし）	0	5	2	0	0	7
名詞＆動詞	15	40	2	52	1	108
間投詞	9	6	12	12	3	36

結果を見ると，動詞の用法を持たない名詞，及び名詞の用法を持たない動詞の擬音・擬態語の派生起源は，大半はそれぞれ名詞，動詞であった．しかし，名詞と動詞の両方の用法が記載されている語については，派生の起源が動詞と記載されているものの方が 2 倍以上多かった．

ただし，間投詞用法を持つ語には，これとは逆の傾向が見られる．つまり，名詞起源の語の方が動詞起源の語よりも多い．また，間投詞が起源となり名詞へと派生するという関係が成立するのは，3 語／136 語（＝ 2（「名詞（動詞なし）」の間投詞起源 pfft, tantara）＋ 1（「名詞＆動詞」の間投詞起源，zonk[11]））のみであった．これは田守・スコウラップの指摘（＝（14）（ii））とは合わない．田守・スコウラップは，間投詞としてまず用いられた臨時語が名詞として使用されるようになり，それが定着して動詞として使用されるようになるという語形成過程を示唆したが，この過程を経ることは語彙形成過程としては稀なことが明らかとなった．むしろ，名詞や動詞が起源となり，間投詞用法を派生させている語の方が多い．

次頁の表に示すように，擬音語と擬声語を分けて比較しても，名詞よりも，動詞が派生起源となっているものの方が多いという全体の傾向が見られた．

以上のように，本調査では田守・スコウラッ

11）zonk は，動詞用法が名詞・間投詞用法から派生したと OED に記されている．かつ，名詞と間投詞用法では，間投詞用法の方が主要であると記載されていることから，間投詞→名詞→動詞と用法が派生したと考えられる．

表５　擬音語と擬声語の派生起源比較

	名詞起源	動詞起源	間投詞起源	不明	重複	計
擬音語	13	25	4	44	3	83
擬声語	10	20	2	22	1	53
計	23	45	6	66	4	136

プ（1999）の主張とは矛盾する結果が得られた．次節では，なぜ両者が矛盾するのかについて考察し，さらに名詞派生起源語と動詞派生起源語の特徴的な違いを明らかにしたい．

４．考察

4.1　先行研究の予測と矛盾する結果が得られた原因

田守・スコウラップ（1999）は，臨時語は名詞として用いることはできても動詞として用いることはやや難しい事例を示し，擬音語は名詞として用いる場合より，動詞として用いる場合の方がより慣習的な定着度が必要になることを指摘した．この指摘から，英語擬音語は動詞よりも名詞語彙の方が多いという予測と，擬音語の派生起源の多くは動詞より名詞であるだろうという予測を導き，OED での調査を行った．その結果，予測は正しくなかったことが明らかとなった．これは何を意味するのか．

田守・スコウラップが名詞用法の方が臨時語を使用しやすいことを示すためにあげた例（=(5)－(7)）を再検討すると，名詞として用いられている場合にはいずれも引用符が付されている（eg. With a loud “schlook”）．それに対して，動詞用法の例では引用符は付されていない．両者の臨時語の許容度の違いが名詞用法と動詞用法という品詞の差にないとするならば，許容度の違いはこの点に起因するのではないかと考えられる．すなわち，引用符の記号が，名詞でないものを名詞化する機能を果たしているのであり，臨時語自体が名詞化されているわけではないということである．また語尾変化を伴っているか否かも重要な違いであると考えられる．名詞用法では，基本的に複数語尾が付されない原形での使用に限られる．不自然な例として挙げられている動詞用法の例では，臨時語は過去時制語尾がついた屈折形で使用されている．屈折形での使用可能性は，名詞や動詞としての定着度に密接な関係がある．以上のような原因により，田守・スコウラップ（1999）は（1）－(7)の一連の事例観察から，擬音語は名詞用法より，動詞用法の方がより慣習的な定着度が必要になるという，本論文の調査結果と矛盾する結論を導いてしまったのだと考えられる．

4.2　動詞派生起源語と名詞派生起源語の違い

動詞を派生起源とする語と名詞を派生起源とする語で違いがあるのかを調べるため，両タイプの語の形式と意味について比較を行った．意味は，OED に記載されている第一義を取り上げた．結果，次のような違いが見られた．

(15) 動詞派生起源語と名詞派生起源語の違い
(i) 名詞派生起源語には通常語彙にはない綴り字が使われているものがある．（語末の短母音 tantara, 子音連続 pfft, 語末の母音 -h wah-wah 等）
(ii) 名詞派生起源語には，同音あるいは類似音の繰り返しを含む合成語となっているものがある．（choo-choo, ding-a-ling, haw-haw, pit-a-pat, rat-a-tat, rat-tat, tom-tom 等）
(iii) 動詞派生起源語よりも，名詞派生起源語の方が音や声を発する対象の指定範囲が狭い傾向にある．（名詞派生起源語 : cuckoo, beep, haw, pump, tweet　等，　動詞派生起源語 : crack, frizz, growl, grunt, peep 等）
(iv) 動詞派生起源語の方が，音の様態の指定が詳細である．

(i) と (ii) は綴り字と発音に関するもので

ある．名詞派生起源語には，実際に聞こえる音をより忠実に再現したものが含まれるため，通常の語彙には使わない綴り字や繰り返し法を用いたりして音を再現しようとするのだと考えられる．(i) あるいは (ii) は，名詞派生語全23語中11語に該当した．それに対して，動詞派生起源語（45語）では綴り字が変則的なものや繰り返しが含まれる綴り字は一つも見られなかった．(iii) と (iv) は語義に関するものである．名詞派生起源語は，音や声を発する対象が限定されているものが多い．例えば cuckoo は，カッコウの鳴き声からカッコウを意味する語であるが，カッコウのみを声の発生源として指定する． beep では電子機器，haw では人，pump はポンプ，tweet は小鳥と，それぞれ声や音を発する対象が狭められている．名詞派生起源語（23語）で (iii) が当てはまる語は17語と，7割強を占める．これに対し，動詞派生起源語（45語）では22語であり，残り23語の5割強は比較的広い対象を音の発生源として含む．例えば crack は割れたり折れたりするものであれば，木の枝でもガラスでも，体の骨でも心でもよい．同様に，frizz は炒めてパチパチ跳ねる音をたてるもの，growl は低い喉からのうなり声を出す動物，grunt は低いうなり声を出す動物や人，peep は弱く高い声で鳴く小鳥やネズミ等の小動物であればよく，対象の限定が強くない．

音や声の発生源に対する指定が緩いことと連動するように，動詞派生起源語では，音そのものへの描写が名詞派生起源語よりも詳しい．名詞派生起源語と動詞派生起源語の語義において音を描写する語句を数えると，前者では平均1.8語が用いられているのに対し，後者では3.9語が用いられている[12]．数え上げの基準は次のようなものとした．

(16) 音を描写する語句として数え上げる対象の基準

イ） 音を記述するために用いられている形容詞，副詞，動詞語句を数える．ただし，名詞が of や with 等と用いられて形容詞的，あるいは副詞的に用いられている場合には，これも一つとして数える．動詞は，単に音を発するという意味を表す語句（ utter, produce 等）は数えず，音の記述に貢献する内容を持つものに限って数える．

ロ） 音を出す主体を記述する名詞，形容詞は含まない．

ハ） 同一の語に対する語義説明において，同じ語が同じ意味で繰り返し用いられている場合には，2回目以降は数えない．

ニ） 名詞が of や with 等と用いられて形容詞的，あるいは副詞的に用いられている場合は，修飾内容を区切るのが難しいので，長い句であっても一つと数える（例 in a querulous tone, with abruptly checked movement, in excitement or emotion）．

ホ） 比喩的用法の説明内容は，拡張用法であるとみなし，第一義ではないと判断し，数え上げの対象から外した（例 keck の「Also fig. expressing strong dislike or disgust.」の記載）．

例えば，名詞派生起源語の choo-choo は，蒸気機関車の発する音であるという以上の音の説明はない．同様に，ding-a-ling も重いベルや金属が打たれた際に響く音だという以上，特に音に関する描写はない．名詞派生起源語において，音・声の発生源を特定する傾向があることを考慮すると，名詞派生起源語は音の発生源とされる対象が出す典型的な音を表すのであり，それ以上に詳しい音の表し分けはなされないのであろうと考えられる．これに対して動詞派生起源語では，音や声の発生源を狭く指定しない代わりに，音の描写は名詞派生起源語よりも詳しい傾向が見られる．例えば，crack は，折れたり壊れたりする時に生じる乾いた鋭い音 (a dry sharp sound) であると記載がある．同様に hum は，蜂や他の昆虫類の発する低く持続的なかすかな音あるいは高速回転するコマや車

12) それぞれの語の語義における描写語句の比較は，付録②を参照されたい．

輪，打たれた後のベルの振動音と記載されている．このように，音がどのようにして出るのか，どのような音が出るのかといった描写が見られるのが特徴的である．

以上，（15）の４つの違いが，名詞派生起源語と動詞派生起源語の間に観察された．田守・スコウラップ（1999: 100）は，「表される出来事が明確に限定されていな」い場合や「まとまりがな」い場合には名詞として認めにくいと述べ，意味の違いにより名詞か動詞かで品詞の偏りが見られることを示唆したが，今回の調査結果からは，意味の違いが派生起源の違いに結びついているとは考えにくい．例えば ding（動詞派生起源）と ding-a-ling（名詞派生起源）はほぼ同じように鐘のなる音を表す．また，peep（動詞派生起源）と tweet（名詞派生起源）も同じように小鳥の鳴き声を表す．ただし，動詞の方が音を出す行為に注目した描写になるため，具体的な音や音を出す対象を表す傾向にある名詞派生起源語よりも，抽象的な意味を持つという違いはあると言える．

５．まとめ

先行研究からは，英語の擬音・擬声語は名詞の方が動詞よりも語彙数が多く，臨時語の間投詞用法→名詞→動詞という派生過程が成立しやすいという命題が導かれたが，本稿で行った OED における記載の調査では，これらの命題は間違っているという結果が得られた．擬音・擬声語語彙の数は名詞より動詞の方が多く，間投詞用法→名詞→動詞という派生過程も稀にしか見られないものであることが分かった．今回の調査では，動詞，あるいはそれより低い頻度で名詞が起源となり，間投詞用法を派生させている語の方が多いという結果が得られた．

最後に，名詞派生起源語と動詞派生起源語に特徴の違いがあるのか，形式と意味の点で比較を行ったが，田守・スコウラップ（1999）で指摘されたような，指示される出来事の性質の違いは見られなかった．名詞派生起源語では，変則的な綴り字が見られるほか，音や声の発生源となる対象を特定しようとする傾向が強く，音の様態への指定は逆に緩い傾向が見られた．それに対して，動詞派生起源語では，音や声の発生源となる対象の特定度合いはあまり高くなく，どのようにして音や声を出すのかや，どのような性質の音を出すのかについての記述が詳しい傾向にあることが分かった．

田守・スコウラップ（1999）をはじめ，英語の擬音語・擬態語に関する重要な研究においても，英語よりも日本語の方が豊富な擬音語擬態語体系を持つためか，日本語の擬音（態）語の派生過程（間投詞的用法➡名詞・動詞用法）が英語の擬音（態）語の分析の際にも当てはめられている（例　筧 1986）．しかし，英語では日本語とは異なる派生過程を想定する必要があることが本論文の調査で明らかになった．今後の英語の擬音語／擬態語研究をする上で踏まえておくべき事実を提示することができた．

今回の調査では，調査対象の語を，OED における語源記述に「Echoic」と記載のあるもののみに絞ったが，OED の語源記述としては「Imitative」もある．これは音の模倣だけでなく，他の語の模倣が起源であることを表すこともあるため調査対象から外した．しかし，より包括的な研究のためには，「Imitative」の語源記述がある語にも調査を広げる必要がある．また，現在使用されている擬音語・擬声語の選定は，『英擬音語辞典』に掲載されているか否かという基準で行ったが，掲載されていない語であっても現在使用されている語は含まれることが予測されるため，今後はこの点からも範囲を広げて調査する必要がある．

参考文献

尾野秀一. 1984.「序文」尾野秀一（編著）『日英擬音・擬態語活用辞典』pp. iii-xxix. 東京：北星堂書店.

筧壽雄. 1986「英語の擬音語・擬態語－主として日本語との対比において」『日本語学』5, 39-46.

筧壽雄. 1988.「アメリカ英語のオノマトペ」比嘉正範（編著）『アメリカの言語文化 II―アメリカの社会と言語』67-82. 東京：日本放送

出版協会.
角岡賢一. 2007.『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』東京：くろしお出版.
スコウラップ , ローレンス. 2011, 1993.「日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの分布について」筧壽雄・田守育啓（編）『オノマトピア』東京：勁草書房.
鈴木雅子. 2014.「解説―歴史的変遷とその広がり」小野正弘（編）『日本語オノマトペ辞典』東京：小学館.
田守育啓. 2011, 1993.「日本語オノマトペの統語範疇」筧壽雄・田守育啓（編）『オノマトピア』東京：勁草書房.
田守育啓・ローレンス スコウラップ. 1999.『オノマトペ－形態と意味』東京：くろしお出版.
西村香奈絵. 2014.「擬音語・擬態語に関する日英対照研究 --Beatrix Potter『The Tale of Peter Rabbit』他とその日本語訳を観察対象として」『教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』（近畿大学）5-1, 55-72.
山口仲美. 2012, 2002.『犬は「びよ」と鳴いていた』東京：光文社新書.

参考辞書

『いろんな国のオノマトペ』（こどもくらぶ編 , 東京：旺文社, 2008）.
『ジーニアス英和辞典』（電子辞書版, 東京：大修館書店, 2001-2008）.
『新英和大辞典 第 6 版』（電子辞書版, 東京：研究社, 2002/2008）.
『日英擬音・擬態語活用辞典』（尾野秀一編著, 東京：北星堂書店, 1984）.
『日本語オノマトペ辞典』（小野正弘編, 東京：小学館, 2014/2007）.
『マンガで楽しむ英語擬音語辞典』（新装コンパクト版）（『リーダーズ英和辞典』編集部編, 東京：研究社, 2007）.
『ランダムハウス英和大辞典』（第 2 版）（電子辞書版, 東京：小学館, 1973/1994）
Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM（v.4.0.0.3）（Oxford: Oxford University Press, 2009）.

付録①　「調査対象とした 136 語の一覧表」

	単語	品詞	語源の品詞
1	bam	INT	記載なし
2	barf	N V	V
3	bing	N INT	N
4	bleep	N V	N
5	blip	N V	記載なし
6	bonk	N V	記載なし
7	bop	N V	記載なし
8	chink	N V	記載なし
9	choo・choo	N V	OED に動詞の記載がないがランダム，研英大，プラスに動詞が記載．おそらく名詞起源
10	chuck	N V	記載なし
11	chuckle. v.	N V	V
12	churr	N V	V
13	clack	N V	記載なし
14	clang	N V	V
15	clash	N V	おそらく同時期
16	click	N V	記載なし
17	clink	N V	記載なし（起源は動詞か）
18	clonk.	N V	記載なし
19	clunk	N V	記載なし
20	cock	N	記載なし
21	cough	N V	V
22	crack	N V ADV INT	adv. Int は動詞語幹起源 名詞は OE では知られていないが，近親言語に早期から出現している
23	crake	N V	記載なし
24	creak	N V	V
25	crow	N V	V
26	cuckoo	N V	N
27	curr	N V	記載なし
28	ding	N V ADV	V
29	ding-a ling	N	N
30	ding-dong	N V A ADV	記載なし
31	dong	N V	記載なし
32	fizz, fiz	N V	V
33	flick	N V	N
34	frizz	V	V（fry）+echoic termination
35	giggle	N V	V
36	gluck	N V	記載なし
37	glug	N V	記載なし
38	goo-goo	V INT	INT
39	growl	N V	V
40	grunt	N V	V
41	guffaw	N V	記載なし
42	gulp	N V	V
43	gurgle	N V	V
44	gurk	N V	記載なし
45	haw	N INT	N
46	haw-haw	N V INT A	N
47	hawk	N V	V
48	hee-haw	N V	N
49	honk	N V	記載なし
50	hoot	N V	V
51	howl	N V	V
52	hum	N V	V
53	katydid	N	記載なし
54	keck	V	記載なし
55	knap	N V	記載なし
56	knock	N V	V
57	mew	N V INT	記載なし
58	mewl	V	V
59	moo	N V	V
60	mum	N V INT A	N
61	oink	N V	記載なし
62	peep	N V	V
63	pfft	N INT A DV	INT（ADV N）
64	phut	N INT ADV	記載なし
65	ping	N V	記載なし
66	pinge	N V	記載なし
67	pip-pip	N INT	記載なし
68	pit-a-pat, pit-pat	N V A ADV	N A ADV
69	plop	N V ADV INT	記載なし
70	plump	N V A ADV	V
71	plunk	N V INT ADV	V
72	pow	N INT	記載なし
73	puff	N V INT	記載なし

74	puff ー puff	N INT	記載なし
75	pule	N V	V
76	pump	N V INT	N
77	purr	N V	記載なし
78	put-put	N V	記載なし
79	putter	N V	記載なし
80	rap	N V	記載なし
81	rataplan	N V	記載なし
82	rat-a-tat	N ADV	N
83	rat-tat	N V	N
84	rattle	N V	V
85	screak	N V	V
86	screech	N V	V
87	shush	N V	V
88	splosh	N INT ADV	不明（ただし，int. adv. も v と 同 じ. つ ま り，int.adv. の用法も n に基づく）
89	strum	N V	V
90	swash	N V INT ADV	記載なし
91	tack	N V	記載なし
92	tang	N V	記載なし
93	tantara	N INT	N INT
94	tap	N V	V
95	throb	N V	V
96	thrum	N V	記載なし
97	thud	N V	記載なし
98	thump	N V	記載なし
99	thwack	N V INT	V
100	tick	N V	記載なし
101	ting	N V ADV	V
102	tink	N V INT	記載なし
103	tock	N V	記載なし
104	tom-tom	N V	N
105	tong	N V	記載なし
106	tonk	N V	記載なし
107	tum	N V	記載なし
108	twang	N V	記載なし
109	tweedle	V	記載なし
110	tweet	N V INT	N
111	voom	INT	記載なし
112	vroom	N V	記載なし
113	wah-wah	N V	N
114	whack	N V	記載なし
115	wham	N V	記載なし
116	whang	N V	記載なし
117	whee	V INT	INT
118	whew	N V	記載なし
119	whimper	N V	V
120	whistle	N V	V
121	whizz	N V INT ADV	V
122	whomp	N V	N
123	whoom	V	V
124	whump	N INT	記載なし
125	yackety	INT	記載なし
126	yah	N INT	記載なし
127	yahoo	INT	記載なし
128	yap	N V	記載なし
129	yawp, yaup	N V	V
130	yeow	INT	記載なし
131	yip	N V	記載なし
132	yum	INT	記載なし
133	zap	N V INT	V INT
134	zing	N V INT	N
135	zonk	N V INT	INT
136	zoom	N V INT	V

付録②　「名詞／動詞派生起源語一覧と及びその第一義比較」

「OED 記載の第一義」欄の下線は，（16）の基準に基づき，音を描写する表現として数えた語句である．

動詞派生起源語

	単語	OED 記載の第一義
1	clang	1 intr. To emit a loud resonant ringing sound as of pieces of metal struck together, etc. In earliest use said of a trumpet.
2	chuckle	To laugh in a suppressed manner; to laugh to oneself; to make or show inarticulate signs of exultation or triumph.
3	churr	intr. To make the sound described under churr n. （Expressive of a somewhat deeper and hoarser sound than chirr.）
4	barf	intr. To vomit or retch. Occas. trans.（also with up）.
5	cough	.1.a intr. To expel the air from the lungs with a more or less violent effort and characteristic noise, produced by the abrupt forcible opening of the previously closed glottis; usually in order to remove something that obstructs or irritates the air-passages.
6	crack	orig. To make a dry sharp sound in breaking, to break with this characteristic sound; hence, in branch I, mainly or exclusively of the sound; in II, of the act of breaking.
7	creak	intr. To make a harsh shrill grating sound, as a hinge or axle turning with undue friction, or a hard tough substance under pressure or strain. Also fig.
8	ding	intr. To sound as metal when heavily struck; to make a heavy ringing sound.
9	fizz, fiz	intr. To make a hissing or sputtering sound.
10	frizz	intr. To make a sputtering noise in frying. b.b trans.
11	crow	intr. To utter the loud cry of a cock.
12	gulp	trans. To swallow in large draughts or morsels hastily or with greediness. Chiefly with down, † formerly also in, up.
13	gurgle	Of water or other liquid: To flow in a broken irregular current, with intermittent low noises, as water from a bottle, or a stream among stones.
14	giggle	ntr. To laugh continuously in a manner not uproarious, but suggestive either of foolish levity or uncontrollable amusement. Cf. snigger, titter. Also with on, out.
15	growl	Of an animal: To utter a low guttural sound, expressive of rising anger.
16	grunt	intr. Of a hog: To utter its characteristic low gruff sound. Also of other animals and of persons（with conscious allusion to the pig）: To utter a sound resembling this.
17	hawk	intr. To make an effort to clear the throat of phlegm; to clear the throat noisily.
18	hum	intr. To make a low continuous murmuring sound or note, as a bee or other insect; also said of a top or wheel in rapid rotation, a bell vibrating after being struck, etc.
19	knock	intr. To strike with a sounding blow, as with the fist or something hard; esp. to rap upon a door or gate in order to call attention or gain admittance（const. at, † on, † upon）.
20	hoot	intr. To shout, call out, make an inarticulate vocal noise; to toot with a horn; now, esp., to utter loud sounds of disapproval or obloquy
21	howl	intr. To utter a prolonged, loud, and doleful cry, in which the sound of u（ū）prevails. Said of dogs, wolves, and various wild animals; formerly also of the owl（now said to screech or hoot）.
22	plump	intr. To fall, drop, sink, plunge, or impinge, with abruptly checked movement, as when a solid body drops, a.1.a into water, etc., or b.1.b upon a surface; to fall, plunge, or come down（or against something）flatly or abruptly（usually implying ‘with full or direct impact’）.
23	plunk	I.1.a trans. To pluck（a string）so as to cause an abrupt vibratory sound; to twang sharply. Also, to play（a note）or pick out（a melody）on a stringed instrument.

24	mewl	To cry feebly, whimper, like an infant; to make a whining noise. Also trans. with out. b.b To mew like a cat.
25	moo	Of a cow or ox: To low. b.b Of a person: To utter the sound represented by ‘moo’ .
26	peep	1.a intr. To utter the weak shrill sound proper to young birds, mice, and some kinds of frogs; to cheep, chirp, squeak.
27	rattle	Of things: To give out a rapid succession of short sharp sounds, usually in consequence of rapid agitation and of striking against each other or against some hard dry body.
28	strum	trans. To play on（a stringed instrument）carelessly or unskilfully; to produce（notes, a tune, etc.）by such playing. Also with out, over.
29	pule	intr. To cry in a thin or weak voice, as a child; to whine, to cry in a querulous tone.
30	tap	trans. To strike lightly, but clearly and audibly; rarely applied by meiosis to a sharp knock or rap. to tap up, to rouse, cause to get up by tapping at the door. to tap out, to mark or signify by a tap or series of taps; to cause to be produced thus; spec. to type out（a letter, etc.）.
31	screak	intr. To utter a shrill harsh cry; to screech or scream. Also with out.
32	screech	Intr. To utter a sharp, piercing cry, as of pain or alarm; to scream or call out with a shrill voice; also occas. used transf. of inanimate things.
33	shush	To call or reduce（someone）to silence by uttering the sounds denoted by sh-sh. Also const. advs.
34	throb	Intr. Of the heart: To beat strongly, esp. as the result of emotion or excitement; to palpitate. Sometimes said of the pulse, bosom, temples, brain, or even of the blood in the vessels.
35	thwack	trans. To beat or strike vigorously, as with a stick; to bang, thrash, whack.
36	ting	1.1 trans. To cause（a small bell or the like）to emit a ringing note; in quot. 1607, to try（a coin）by ringing in order to test its genuineness.
37	whistle	intr. To utter a clear, more or less shrill sound or note by forcing the breath through the narrow opening formed by contracting the lips（the tone being produced merely by the resonance of the mouth-cavity, without vibration of the vocal cords）: esp. as a call or signal to a person or animal, also as an expression of derision, contempt, etc.,
38	whizz	1. a.1.a intr. To make a sound as of a body rushing through the air（see whizz n.1）;（of trees）to rustle;（of a burning or hot object）to hiss, sizzle. Now dial.
39	whoom	ntr. To make a resonant booming or rushing sound. Hence as n.
40	whimper	intr. To utter a feeble, whining, broken cry, as a child about to burst into tears; to make a low complaining sound.
41	zap	To kill, esp. with a gun; to deal a sudden blow to.
42	zoom	1 intr. To make a continuous low-pitched humming or buzzing sound; to travel or move（as if）with a ‘zooming’ sound; to move at speed, to hurry. Also loosely, to go hastily. Freq. with advbs. colloq.
43	yawp, yaup	1.a intr. To shout or exclaim hoarsely; to yelp, as a dog; to cry harshly or querulously, as a bird.
44	keck	1 intr. To make a sound as if about to vomit; to retch; to feel an inclination to vomit; hence to keck at, to reject（food, medicine, etc.）with loathing. Also fig. expressing strong dislike or disgust.
45	tweedle	intr. Of a musical instrument or one who plays it: To produce a succession of shrill modulated sounds; also, to play triflingly or carelessly upon an instrument; of a bird, etc., to whistle or pipe with modulations of tone.

※ 44 keck, 45 tweedle は動詞用法のみの記載.

名詞派生起源語

	単語	OED 記載の第一義
1	bing	A thump or blow. dial.（See E.D.D.）b.b int. All of a sudden; in a flash; with a bang.
2	bleep	A thin, high-pitched blipping sound, spec. one made by electronic equipment.
3	choo・choo	An imitation of the sound of a steam-engine, used as a nursery name for a railway train or locomotive. Chiefly U.S.
4	cuckoo	A bird, Cuculus canorus, well known by the call of the male during mating time, of which the name is an imitation. cuckoo's note（fig.）: repetition of the same words.　2 The note of the bird, or an imitation of it.
5	ding-a・ling	= ding n.2（The stem of ding v.2, used as an imitation of the ringing sound of a heavy bell, or of metal when struck. Often adverbial or without grammatical construction, esp. when repeated.）
6	flick	A light blow, esp. one given with something pliant, a whip, etc., or with the finger-nail.
7	haw	An utterance marking hesitation: cf. ha int. 3. Usually in collocation with hum. See also haw-haw.
8	haw-haw	int. An expression of hesitation uttered repeatedly in an affected tone. Also, the representation of loud or boisterous laughter.
9	hee-haw	1 A conventional representation of the bray of a jackass; a name for this.
10	mum	Refusal to speak, silence. colloq.　int. A command to be silent or secret; ‘hush!’ ‘silence!’ ‘not a word!’
11	pfft	= phut int.（adv., n.）（An imitation of a dull, abrupt sound, esp. that of a firearm. Phr. to go phut: to come to a sudden end; to break down, cease to function. Also as n., the sound of something ‘going phut’ .）
12	pit-a-pat, pit-pat	An imitation of the repeated or alternated sound made by the strong beating or palpitation of the heart in excitement or emotion; also of that of light or rapid footsteps, or of similar alternating or reiterated sounds.
13	pump	A mechanical device, commonly consisting of a tube or cylinder in which a piston, sucker, or plunger is moved up and down by means of a rod, or rod and lever, so as to raise water by lifting, suction, or pressure, the movement of the water being regulated by a suitable arrangement of valves or clacks; from early times used on board ship to remove bilge-water; also, from 16th c., for raising water from mines, wells, etc.; now, a generic term for a great variety of machines and mechanical devices for the raising or moving of liquids, compressing or rarefying of gases, etc.
14	rat-a-tat	= rat-tat.
15	rat-tat	A sharp rapping sound, esp. of a knock at a door.
16	tantara	A int. Imitative of the sound of a flourish blown on a trumpet, or sometimes of a drum.
17	tweet	An imitation of the note of a small bird. Also repeated.
18	wah-wah	Mus.（orig. Jazz）. A musical effect achieved on brass instruments by manipulation of a mute and on an electric guitar by means of a pedal controlling output from the amplifier.
19	whomp	A heavy, low sound. b.b A heavy blow; also fig.
20	zing	A sharp, high-pitched ringing sound; a twang.
21	tom-tom	a.1.a A native East Indian drum; extended also to the hand-beaten drums of Asia and Africa generally.
22	cock	The male of the common domestic fowl, Gallus domesticus, the female being the hen.（Often called in U.S., as in Kent, rooster.）
23	katydid	A large longhorn grasshopper of the family Tettigoniidæ, of arboreal habits, which produces by stridulation a noise to which its name is due; the common or broad-winged species（Cyrtophyllum concavum）abounds in the central and eastern states of America.

※ 13 pump は，ポンプする動作や音は動詞から派生しているが，その動詞は「ポンプ」という名詞から派生している．

※ 22 cock と 23 katydid は名詞用法のみの記載．